京都大学	博士（　文学　）	氏名	坂　堅太
論文題目	一九五〇年代の安部公房における共同体の問題―民族・階級・言語―		

（論文内容の要旨）

本論文は、文学者・安部公房（一九二四‐一九九三）が一九五〇年代にたどった文学的・政治的変容を、ナショナリズム・コミュニズムなどの「共同体」を巡る思想や幼少期安部の植民地体験、そして同時代の政治状況との関連から分析したものである。一九五一年に日本共産党へと入党した安部は、党の掲げた反米ナショナリズムにいかなる動機を持ってコミットしたのか、その経験はどのような形で安部の文学に影響を与えたのか、という問題が考察されている。

論者はまず、安部公房に関する研究史を概観したうえで、問題の所在を確認している。一般的に安部は、ナショナリズムを徹底的に批判した「無国籍作家」、「国際的作家」と形容されることの多い文学者である。しかし、安部のナショナリズム批判も、またそれを作家の本質であるとみなす評価言説も、ともに一九六〇年代以降に生み出されたものであり、それ以前、つまり一九五〇年代の共産党員時代は視野の外に置かれていた。安部の死後、未発表作品や書簡を含む全集の刊行が開始されたことにより、五〇年代の活動についての資料状況も整備され、近年では多くの研究成果が生み出されている。しかしそうした研究では、一九五〇年代固有の可能性にのみ焦点が当てられ、その経験が六〇年代以降の安部の文学にいかなる影響を与えたのかという視点はない。そのため、一九五〇年代のナショナリスト／六〇年代以降の反ナショナリスト、という作家イメージの分裂が進んでしまってもいる。

そうした研究状況を踏まえ、本論文は、安部のナショナリズム認識に焦点を当て、その変容の過程を分析している。六〇年代以降に展開される安部のナショナリズム批判の起点を五〇年代の活動に見出すことで、従来の作家イメージの分裂を止揚し、安部の文学を総体として把握しようとする試みである。

以下、各章の内容を概観していく。

第一章「言語への不信――〈真善美社版〉『終りし道の標べに』における「ノート」という形式について」では、安部のデビュー作である小説『終りし道の標べに』（一九四八年）を分析対象とし、安部の文学的出発がいかなるものであったかを確認している。後年、安部が「実存主義を観念から体験のレベルに投影したらどうなるかという一つの実験だった」と回想していることを踏まえ、その「実験」の内実とはいかなるものであったかが作品の構造的分析から明らかにされている。論者は、この作品が一般的な近代小説のスタイルではなく、メタ的な視点を取り入れるために「ノート」という形式が取り入れられている点に着目する。先行する「ノート」への批判により各章が書き継がれていくという連関関係や、作中人物による「ノート」解釈とそれへの反論の挿入、さらには語り手＝書き手として全体を統御するはずである「私」の崩壊など、様々な小説手法が用いられることにより、作品は一義的な解釈を拒絶する「象徴的言語」となっている、と論者は結論づける。そしてその形式的特徴は、言語による代理＝表象を拒絶したいという「私」の思弁的告白とも緊密な繋がりを持っていることが明らかにされ、同時代的には失敗とみなされていた安部の「実験」が、実際には一定程度の成功をおさめていたことが示されている。

第二章「レジスタンス主体としての「国民」概念――安部公房の国民文学論、その可能性と限界」では、一九五〇年代の戦後国民文学論争において安部が展開した言説が分析対象となっている。竹内好の問題提起に端を発した戦後国民文学論争は、文学者だけでなく歴史学者や社会学者、政治学者など様々な領域の人々を巻き込むものへ

と発展した。文壇文学／大衆文学という分裂した文学状況の根本にある「近代主義」を批判する竹内は、封建制から完全に解放された近代的国民主体の確立を訴え、その達成を文学的に示すものとして国民文学を位置づける。これに対し、当時日本共産党が掲げていた反米ナショナリズムにコミットしていた『人民文学』派の文学者たちは、反米闘争に資するレジスタンス文学として国民文学を構想し、竹内のような近代的個人の確立を目指す議論を批判した。従来、安部の議論は後者の政治的な国民文学論の一派とみなされ、文学史的には見る価値のないものとされてきたが、論者はそうした評価を否定する。論者によれば、安部の議論は以下の二点において異なる論点を提示していたという。（１）安部は国民文学の確立を創作方法の問題と結び付けて考えていたが、それは当時にあってはいずれの立場からも否定されていたものであった。（２）安部は求められる「国民」の姿を反植民地闘争の抵抗主体としてのみ捉えており、そこには封建制との対決という視点が完全に抜け落ちていた。（１）の点は、国民文学の問題をより実践的な領域において捉えうるものであり、そこにはこれまで指摘されてこなかった「可能性」を見ることができる。一方（２）の点は、安部の議論に政治的な色合いを過剰に与えることとなり、（１）のような「可能性」から、従来の論者たちの眼をそらす「限界」として機能することとなった。そして論者は、安部の国民文学論が（２）のような「限界」を抱え込まざるをえなかった理由を安部の満洲体験と結び付けて説明し、一九五〇年代の安部が見せたナショナリズムへのコミットが、コロンとしての罪の意識と密接に結びついたものであったことを提示している。

第三章「主観的被害者か、客観的加害者か――「変形の記録」における死人形象と戦争責任論」では、『群像』（一九五四年四月号）に掲載された小説「変形の記録」が取り上げられている。戦死者を語り手として中国戦線を描くこの小説について、論者はまず死人という語り手の形象に注目する。当時安部が主張していた記録芸術論を補助線としながら、この形象が「実体を持たない記号」を示すものであることを明らかにした論者は、戦争を巡る言説状況を寓意的に描いた小説としてこの作品を位置づける。語り手である「ぼく」は一兵卒の死者として、将校など軍の上流階級にある人々の加害性を告発し、自身の被害性を強調している。支配者／被支配者、という階級差に基づく加害／被害の関係を強調する「ぼく」の語りは、当時国内で支配的な戦争責任観であった指導者責任観を象徴するものとして造形されている。これは占領終結後のナショナリズムの高揚の中、戦争責任そのものを否定するような旧軍人たちによる主張に対する批判として機能した一方、戦争責任を国内的なものに限定することにより、対外的な侵略責任を後景に押しやってしまうものでもあった。その点で、この作品に他民族の死人が登場し、日本兵としての「ぼく」の加害性を問うていることは重要である。それまで階級差に基づく加害／被害の語りを展開してきた「ぼく」は、日本人／中国人という民族間の加害／被害関係を突きつけられることにより、自身を被害者として位置付けることが不可能になってしまう。ここには、国内的に閉じたものへと変質しつつあった戦争責任を巡る言説状況に対し、国外からの視線を突きつけることでその閉鎖性を問おうとする安部の批評性を見て取ることが可能である。このような国民全体の加害責任を問う認識は、ベトナム反戦運動が高揚した一九六〇年代以降に一般化していくものである。安部がこのような加害認識を時代に先んじて提示することが出来た理由について、論者は安部の植民地体験との関係を指摘し、支配民族としての加害性に意識的であったからこそ、戦争責任論の閉鎖性を批判することが出来た、と説明している。またこの作品で示された加害者としての日本民族に対する視点は、当時の日本共産党の指導者責任観に対する批判でもあり、後に顕在化する党との不和を暗示するものでもあった、と結んでいる。

第四章「安部公房と「一九五六年・東欧」」では、旅行記「東ヨーロッパで考えたこと」・「日本共産党は世界の孤児だ―続・東ヨーロッパで考えたこと」（『知性』

一九五六年九月‐一〇月号）が分析されている。一九五六年四月にプラハで開催されたチェコスロバキア作家大会に出席するため日本を旅立った安部は、大会終了後も現地にとどまり、約二か月間各地を見て回った。同年一月に起きたスターリン批判の余波が冷めやらぬ東欧で安部が見たのは、革命後も残る人々の民族的偏見とそこに示される排他的民族主義である。一般的には否定されるべきこの事象を、安部はむしろ肯定的に評価してみせる。というのも、社会の構成員間の対立・矛盾とは、その止揚によって社会改革を推し進める契機となる、という弁証法的発展を安部は信じたからである。こうした民族間の境界を発見しその可能性を引き出す視角を得た安部は、民族内部に存在する性別や世代といった境界をも浮かび上がらせることで、多様な小集団の混成としての社会イメージを作り上げ、それを理想化する。これは民主集中制の下、強力な指導部によるトップダウン型の権力構造を採択していたソ連や中国、そして日本共産党に対する批判でもあった。こうして安部は東欧での現実から、小集団の対立・矛盾から発展のエネルギーを取り出す「下からの」権力構造の可能性を主張するに至るのだが、一九五六年一〇月に起こったハンガリー事件とそれに対するソ連の強権的な対応は、安部の認識に政治的な限界をもたらすことになる。事件の発生直後、日本でも反共・親共の立場から非難・擁護の意見がそれぞれ生み出されていたが、そうした言説に対し、安部は軍事介入の是非にのみ拘泥してばかりいる、と批判する。代わりに安部が重視したのは、事件の背景にあるハンガリー民衆の不満を引き起こした強権的権力構造の検討であり、この悲劇をいかにして権力構造の転換へとつなげるか、という視点であった。しかしソ連の姿勢を批判する自身の主張が、反共的な言説に利用される可能性を感じてか、翌年になると、安部の議論の重点はむしろ積極的なソ連擁護へと移ることになり、当初のような批判性を失ってしまう。安部は東欧での体験から、同質性に依拠するのではなく、多様性の擁護に立脚する共同体のイメージを獲得したのであるが、その認識の本格的な発展は、政治状況から距離を置くことになる六〇年代の到来を待たなければならなかった。

第五章「「血にまみれた民族」としてのナショナリズム――『けものたちは故郷をめざす』論」では、引揚者の少年を主人公とする『けものたちは故郷をめざす』（『群像』一九五七年一月‐四月）が取り上げられている。論者はまず、『けものたちは故郷をめざす』以前に引揚者を描いた作品である「鴉沼」（『思潮』一九四八年八月）、「〈歴史の頁が〉」（一九五一年ごろ、生前未発表）を分析し、引揚体験に対する安部の意味づけが時代ごとに変容している様を確認した上で、『けものたちは故郷をめざす』ではどのような引揚イメージが語られているかを問う。従来の研究では、主人公の久三少年が日本という国家への帰属を求めながらも拒絶され続けている点を重視し、彼を国家から切り捨てられた棄民として捉え、そこに国民国家への批判意識を読み取るものが殆どであった。しかしそうした先行研究では、久三の夢に出てくる「彼を追いかけるものとしての日本」というイメージの持つ意味が取り逃がされている、という問題点を抱えていることを論者は指摘している。久三は確かに日本人たちからは異質なものとして排除されているが、同時に、他民族からはあくまで「日本人」として扱われ、その植民者としての過去を突きつけられている。ここから論者は、作中には二通りのナショナリズムが描かれている、と考察する。一つは、均質な共同体内部で流通する同質圧力としてのナショナリズム、もう一つが、異質な他者との出会いにより意識されるナショナリズムである。そして安部は、後者のナショナリズム、つまり支配民族の記憶を引き受けるために背負わざるをえないナショナリズムを決して否定していない。つまり論者によれば、この作品で試みられているのはナショナリズム全般の否定ではなく、その質的転換である。そしてこの新たな形でのナショナリズム、共同体原理を追求することが、六〇年代以降の安部の仕事となっていった、と論者は結論づけている。

（論文審査の結果の要旨）

安部公房に関する従来の研究および評論には、おおきく言って二つの潮流がある。一つは、日本共産党からの除名（１９６１年）と代表作『砂の女』（１９６２年）刊行後、つまり著名作家になった１９６０年代以降の文業に注目し、安部をナショナリズム批判に徹した「無国籍作家」とみなす評価である。これは、はやくも１９６０年代当時の評論において持ちだされた評価であり、現在でも有力である。

もう一つは、芥川賞受賞の１９５１年から日本共産党員でありつづけた３０代半ばまでの安部、つまり１９５０年代における安部の言説に着目し、安部をナショナリストとして描く研究である。これは、安部の死後に未発表作品や書簡を含む全集が刊行されたことで促進されたものであり、安部研究の新しい潮流である。

この二つの潮流が有意義に交叉することは、これまでなかった。本論文は、１９５０年代はナショナリスト、１９６０年代以降は反ナショナリスト、という二つの安部の顔を、転換でなく連続したものとして把握しようとする野心的な仕事である。

具体的には、安部のテクスト（『終りし道の標べに』『変形の記録』『けものたちは故郷をめざす』等）と、日本共産党内外で当時おこなわれたナショナリズム論争に対する緻密な分析を通じて、１９５１年に日本共産党へ入党した安部が、党の掲げる反米ナショナリズムにいかなる動機を持って関与したのか、その経験はどのような形で安部の文学に影響を与えたのか、という問題が論じられる。そして、１９５０年代の安部の文業のなかに、１９６０年代以降の安部のナショナリズムとの関わり方の起点となるものを探り出したところに、本研究の最大の意義がある。

第１章では、作家デビューの当初から、思想を小説化することに強いこだわりを持っていた安部の姿が活写される。デビュー作『終りし道の標べに』（旧版、１９４８年）は、大学生時代に傾倒していた実存主義の文学的実験に他ならない。もちろん、こうした指摘は、先行する研究・評論においてすでになされてはいる。だが論者は、失敗に終わった実験だったという一般的な評価に対して異議を唱える。作品の形式的特徴と、言語による代理を拒絶したいという作品中の「私」の思弁とが緊密な繋がりを持っていることを詳細に明らかにし、論者は、実験は成功したという見方を提示する。

第２章から、安部にとってのナショナリズムとはいかなるものかという、本論文の主テーマに入る。まず第２章では、１９５０年代の国民文学論争における安部の立ち位置について、先行研究への批判が展開される。従来この時期の安部は、反米闘争に資するプロパガンダとして国民文学の創成を求める日本共産党系の作家グループに属していたとみなされてきた。実際のところ、安部には反米・反植民地主義闘争の抵抗主体として「国民」を構想するあまり、封建制との対決という視点が薄かったこともあって、当時の安部の文学論には見るべきものがないとされてきた。このような先行研究の見方に対して、論者は二つの反論を加える。第一に安部は、政治的メッセージを込めた作品を書くことが政治参加ではなく、言葉を通じて「意識の構造」を組み替える文学的営為そのものが政治的実践である、という重要な問題提起をおこなった。第二に、安部のナショナリズムの根底には自身の満洲体験（おおよそ１９２５～１９４６年）があり、入植者としての罪の意識が、封建制の克服よりも植民地解放を重視させた。とくに第二の指摘は重要である。なぜなら、日本では国民全体の加害責任を問う声は１９６０年代以降になってから大きくなるのであり、本論文によって、時代に先んじて日本国民の戦争責任・植民地責任を問うた安部の姿が明らかにされたからである。こうした責任認識の起点を、安部の満洲体験に求める立論も、テクストに即して展開されており、高い説得力をもっている。

第３章では、こうした文学論を実践に移したものとして、戦死者を語り手にアジア・太平洋戦争中の中国戦線を描いた『変形の記録』（１９５４年）が分析される。語り手である「ぼく」は、当初、一兵卒の死者として将校など軍の上層部の加害性と自身の被害者性を語っていた。だが、他民族である中国人の死者によって日本兵としての「ぼく」の加害性が告発されることで、「ぼく」は自身を被害者として位置付けることができなくなってしまう。つまりこの作品は、１９５０年代当時の戦争責任論が日本国民内での加害者／被害者論に終始しているという「意識の構造」を問題視し、国外からの視線を導入することで、それを組み替えようとしたものであった、というのが論者の解釈である。正鵠を射た読みであろう。また論者は、日本民族を加害者としてみるこの視点は、日本共産党の戦争指導者責任論に対する批判でもあり、後に顕在化する党との不和を暗示するものでもあった、と指摘する。後付けの感が否めなくもないが、やはりこれも、深い洞察と言うべきだろう。

第４章では、二つの旅行記「東ヨーロッパで考えたこと」と「日本共産党は世界の孤児だ――続・東ヨーロッパで考えたこと」（１９５６年）が分析される。論者は、社会の構成員間の対立が社会改革を推進しうる契機になるという弁証法的発展を安部が信じていたことを論証したうえで、東欧社会主義圏内に残る民族的偏見を、ナショナリズムの克服につながりうる契機として安部がむしろ肯定的に評価したことに注目する。さらに重要なことは、民族間の境界を常に意識しつづけることが社会改革を推進する契機となりうるという視角を東欧旅行で得た安部が、一民族内に存在する性別や世代といった境界もおなじように意識し、多様な小集団が混成する社会を理想化するにいたったことである。こうして安部が、小集団の対立から発展のエネルギーを取り出す「下からの」権力構造の可能性を主張しはじめたことで、トップダウン型の権力構造にこだわる日本共産党との距離がますます広がり、党に対する批判を強めていった道筋を、論者は明らかにしている。

最後の第５章では、満洲引揚者の日本人少年を主人公とする『けものたちは故郷をめざす』（１９５７年）が取り上げられる。従来の研究は、日本人社会が少年を異質なものとして排除する点に着目し、そこに、同質化を強要する「国民国家」に対する安部の批判意識の発露を読み取ろうとしてきた。だが論者は、少年が他民族からはあくまで日本人として扱われ、その過去が批判的に突きつけられることに着目する。つまり作中には、少年という異質な者を排除するナショナリズムと、中国人や朝鮮人という異質な他者との出会いにより意識せざるをえない、あるいは意識すべきナショナリズムの二つが描かれており、安部は前者を批判しつつも、後者のそれ、つまり支配民族であったことに起因する責任を引き受けるために背負うべき民族意識としてのナショナリズムを肯定的にとらえている、と論者は解釈するのである。東欧旅行を通じて民族間の境界の存在に改革を推進する契機を見るようになった安部は、自身の満洲体験を参照しつつ、戦争責任や植民地責任を引き受ける新たな共同体原理としてのナショナリズムを追求することを目指すようになり、それが１９６０年代以降の文業となっていった、というのが論者の最終結論である。

本論文には、安部をリスペクトするあまりのことであろうが、安部は自身の文学論を作品に正しく反映させることができたと考える傾向がある。とくに第１章にそのおもむきが強い。そもそも全体の論旨からすれば、第１章はかならずしも必要ではなかったといえるかもしれない。しかし、こうした問題点は、安部のテクストを精読し、当時の日本の政治・思想状況全体を丁寧に見わたしたうえで、安部文学について新しい視点を打ち出し、十分首肯できる論を展開した本論文の価値を、決して損なうものではない。また、戦争責任や植民地責任に関して深刻な対立を抱える東アジアの現況を鑑みれば、今日的課題に応答した論文だとも言える。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値ある

ものと認められる。なお、２０１３年８月２８日、調査委員３名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第１４条第２項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。